

天文学とプラネタリウム



www.tenpla.net

第69回



今月のお題

事業仕分けと科学の役割



大きな波紋と議論を巻き起こした事業仕分け。天文学や科学を見つめ直すいい機会なのかもしれません。

高梨直紘 (東京大学)
平松正顕 (台湾 国立清華大学)

“基礎科学”と“事業仕分け”

政府の行政刷新会議による事業仕分けが大きな話題となったのは11月終わりのことでした。行政のムダを省くという名目で幅広い事業に点検の目が向けられ、天文学を含む科学研究関連事業についても議論がなされました。本誌読者の皆さんに身近なところでいえば、国立天文台すばる望遠鏡の運用費である国立大学運営費交付金特別教育研究経費も削減との提言がなされました。本稿執筆時点ではまだ最終的な予算計上はなされていないのですが、この号が書店に並ぶころには最終的な方針が出ているでしょうか。

この事業仕分けに関しては「科学も聖域にあらず」とセンセーショナルな報道もなされたようですが、実際に仕分けの議論を聞いてみると必ずしも科学が無駄であるという話にはなっていません。少なくとも議論の中ではむしろ、基礎科学も含めた学術は重要であるのできちんとそこにお金が届くように、周囲の無駄を排除しようというのが仕分け委員の見解でした。

とはいえこの事業仕分けは、学術研究者にとどまらず多くの人に対して「この国の学術研究はどうあるべきか」という問いかけになったと感じています。しかし、例えばすばる望遠鏡がもたらした成果が、その建設と現在までの10年間の運用にかかった費用約700億円（国民一人当たり700円）に見合うかどうかを検証するのは大変難しいことです。仕分け委員であった蓮舫さんの言葉を借りれば、税金を使った基礎科学の「リターン」をどう扱うのか、ということになります。それはやはり、世界中の人がその研究成果に触れることで「すごい」「おもしろい」「人生観変わった」「世界観変わった」という思いを抱き、その研究成果が時間をかけて人類全体の宇宙観の一部となっていくという一連の流れこそが、そのリターンでありましょう。

私たち天プラの活動は、家の中、駅前、都心の高層ビルの屋上などいろんなところで天文学に触れる機会を作り、天文学研究が明らかにしてきた豊かな宇宙を多くの人と一緒に楽しむ場を作り出すことが目標です。税金が投入された天文学研究の説明責任を果たすための活動ではありません。ですが、結果的にその役目を果た



マウナケア山頂のすばる望遠鏡とケック望遠鏡。
未来の宇宙観の礎が今もここで築かれつつある。

せるのであれば大歓迎。理性と感性の両方に響く天文学の面白さを、より多くの人とともに。世界天文年が終わっても天プラは様々なフィールドで活動を続けます。